
こどものじかん

コニ丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こどものじかん

【Nコード】

N9088X

【作者名】

コニ丸

【あらすじ】

幼い頃に両親が離婚し、育ての親である父親から全く関心を持たれていないヤマト。
自分を守る為にウソをついてばかりいるヤマトが、ついに見つけた居場所とは。

第1話（前書き）

この小説は大学生のゲイ二人が書くリレー小説です。よって、先の展開は全く分かりません！笑

なかなか更新できないかもしれませんが、頑張って完結させたいと思うので是非よろしくお願いします。

第1話

結論から言って、愛に飢えているんだと思う。
誰からの？ いや、あらゆるものからの愛に。

ボクは世界中の誰からも相手にされていない。

『ヤマト。お前夏休みくらいどっか行ったりしないのか』

Tシャツにトランクス姿の父さんがガリガリくんをかじりながら言う。

『来週の月曜に友達と川に行くことになってる。智則が免許取ったから、あいつの車で行くんだ』

ボクは価格・c o mで掃除機のレビューとにらめっこをしながら答えた。今使っている掃除機の吸引力の弱さには、いい加減もううんざりだ。

『そうかー気をつけろよ。新免のドライバーの事故は多いからな』

『わかったわかった。じゃあちよつと智則んちに来週の打ち合わせに行ってくるから』

パソコンを消して、そそくさと家を出ようとすると、父さんに呼び止められた。

『これ。』

そう言うと、父さんはボクの手に一万円札を握らせた。ガリガリくんが溶けていたのか、ごつごつしたその手はベタついている。

『御飯でも食べに行きなさい。』

『ありがと。じゃあ行ってくる』

ボクはいつものようにウソをついた。父さんはボクのウソに気づいている。

ボクが友達と川遊びに行くようなヤツじゃないことくらい、さすがに分かっている。でも父さんはウソに対して何も言わないこともボクは分かっている。

男二人で暮らすには広過ぎる玄関を出ると、強烈な熱気が襲った。それと同時に、目の前を陸上部の高校生集団が掛け声を出しながら走り抜けていった。

こんなうだる様な空の下を走るだなんて、とても正気の沙汰じゃない。現にこれ以上歩くのがもう面倒になってきた。

最寄りの駅までは歩いて十五分、、、、しかし今日のボクには久々に重大なミッションがある。

携帯を手に取り、画像フォルダを開く。画像を見た感じ、アタリの予感。

ボクは女に興味が無い。というか、男にしか興味がない。

ボクが幼稚園の頃に両親は離婚し、ボクが中学を卒業するまで父さ

んが経営するパチンコ屋の寮の一室に一人で住んでいた。今改めて考えれば非常識極まりない親だと思うけれど、寮に住んでいるアルバイトや社員の人達とずっと遊んでたし、一緒に御飯も食べたりしていたから寂しくはなかった。

父さんかというと、他の店舗の管理だとか付き合いたとかで週に一、二回程度しか顔を合わすことはなかったけれど、父さんが寮に来ると緊張してしまうから顔を出しに来る水曜日が憂鬱だった。だって、父さんがボクにこれっぽっちも興味が無いことは分かってるから。

父さんの目には今も昔も変わらずボクは映っていない。映っているのは金だけだ。今住んでいる家も仕事関連の知り合いから買ったもので、ボクと父さんで住むにはどう考えても広過ぎだ。

あまりにも広いところに一人で住むのもなんだからボクを呼んだんだろうけど、ボクは基本的に部屋に籠りっぱなしだし、一人暮らしの時と生活のリズムはあまり変わらない。最初に父さんから連絡を受けたときは死ぬほど気が重かったけど、むしろ寮よりも広いし便利で快適で、今となっては何をするにも億劫になってしまっているほど、ここでの生活を満喫している。

だからこうやってたまにゲイ向けの掲示板を見て、気になった相手とメールでやりとりをして、気が合えば実際に会って遊ぶことが気分転換になっている。昨日お互いの画像を交換したんだけど、なかなかカッコいいし向こうもボクのことを可愛いって言ってくれた。可愛いって言われるのは照れるけど、悪い気はしない。

メールと画像の感じからすると、明るそうな人だし仲良くなれそうだな。あれこれ妄想をしながら歩いていると駅が見えてきた。できるだけ汗はかきたくなかったけど、駅についた時にはカッソソに汗がじんわり染みていた。

第2話

時刻は午後一時

ボクは待ち合わせ場所であった駅最寄りのコンビニの前に着いた。

『いらっしやいませ』

ボクの体を取り巻いていた熱気を拭おうとコンビニのなかで待つことにした。

掲示板での出会いを始めた頃は下手に緊張し、挙動不審な行動やドキドキする感覚を持ち合わせていた。しかし今となっては朝起きて歯を磨き、朝食をとり学校へ向かうようなそんな当たり前の日常の中に含まれている。

『あの、、、』

雑誌を読むボクの肩に触れながら、比較的小さな声で誰かが話しかけてきた。

『ヤマトくんだね?』

ボクは彼の顔を見た。

予想は的中。むしろ画像よりもかつこ良く爽やかな顔立ちの青年がそこにはいた。

『はっ、はい、、、ヤマトです、、、』

あえて緊張してるように答えるのもボクの演出。初心でピュなボクを演じることにより

、相手のボクに対する印象は良くなる。そうやって今までも何人も男と遊んできた。

『俺、掲示板の悠介っ！やっぱりヤマトくんは可愛いなあー』

悠介は喋ると言うよりは叫ぶようなトーンで声を出したものだから、懐中電灯をあてられたネズミの群れの様に、コンビニの中の客は僕たちの方を見た。

『ちよっ、声をでかいから！！とりあえずここを出ましょ』

ボクは慌ててコンビニを後にした。

『ごっ、ごめんね。あんまり自分と同じ男性が好きな人と会うことないからテンションあがっちゃって。』

悠介は慌てて飛びだしたボクに追いつくと間髪を入れず、そう告げた。

『そうなんですか・・・ボクもあんまりこっちの人と遊んだこと無いんですね』

今月はこれで6人目

そんな事は自分のキャラを崩してしまうために言えずに、うっすらと浮かべた笑みとともに偽りの自分を見せた。

『あの、お腹空いたんでご飯でも行きませんか』

朝からなにも食べてなかったせいかな、お腹の虫が何度も小さく鳴いた。

『そーいやもう一時過ぎだったよね。飯にしょっか』 『何か食べたもののリクエストとかある？』

『ボク、嫌いなもの無いんで悠介さんにお任せしますよ』

『じゃあ、とりあえず店探そっか！』

波のように押し寄せる空腹感を我慢しつつボクは悠介の後を着いていった。

第3話

ボクは駐車場に停めてあった悠介の車の助手席に乗った。ドアを開けた瞬間、ムワツとした熱気がボクを襲う。

この炎天下の下だと、少しの間駐車しただけなのに、クーラーを切るとすぐに社内の温度が上がってしまう。

『すみませんお邪魔します、、』

『そんなにかしこまらなくていいよ！礼儀正しいんだねー』

『いや、そんなことないですよ！普通ですって！！』

こうやって礼儀正しい若者を装っておけば、まず間違いない。

過去に会った人には、こういったマナーに敏感な人も多くいた。そういう人は視線で、所作を見られていることが分かる。

『謙虚なんだね。今日は何時まで帰らなきゃいけないとかある？』

『いえ、特にはないです』

『そっか。どうしようかな、、じゃあこの間行って美味しかった

ところがあるから、そこでもいい？』

いいですよ。とボクが言うと、鼻歌を歌いながら悠介はナビをいじりはじめた。

その横顔は、遊園地に行くことを楽しみにしている小学生のようだ。目鼻立ちはハッキリしているものの、表情が幼いので、受ける印象としては意外と柔らかい人と言った感じ。

『おー、あったあった。じゃあ行こっか！』

そう言って車を発車させて、悠介とボクはお店に向かった。

腹減ったな。コンビニを出てどのくらい経っただろう？
もう20分以上同じような景色の国道を走っている。

『ヤマトくんは今夏休みかー。いいね、学生って！俺も戻りたいな
ー』

悠介は自分の過去を思い出すように、遠くを見つめながら笑顔を浮かべている。

『そうですかね？俺は早く大人になりたいです』

『なんでそう思うの？』

悠介はキョトンとした顔をして僕の方をチラッと窺った。

『いえ、早く社会人になりたいですね。大学生活も楽しいんですけど、早く両親を安心させたいなって』

いやー、ウソなんだけどね。母親の顔なんて覚えてないからアルバムでしか見たことないし、今どこにいるかも知らないから。私情を話すのはどうしても苦手だ。

『ふーん。両親を安心させることも大事だと思うけど、その時にしかできない！ってこともあるからね』

そう話す悠介はまた遠くを見つめているが、さっきとは違った表情だ。

悠介の表情を見ると、その向こうに見える景色がいつの間にか

閑静な住宅地が変わっていた。どうやらだいぶ遠くまで来てしまったらしい。すると車が速度を徐々に落としてきた。

『もうそろそろだよ。思ったより時間がかっちゃったね、、ほんと腹減った!』

かれこれコンビニを出て40分以上経っただろうか。さすがにボクも空腹感に耐えられなくなってきたところだ。

見慣れない商店街の脇を曲がり、小さな交差点を曲がると古ぼけた定食屋が見えた。

第4話

店内に広がる鰹節のかおり。ボクは少し懐かしさを感じた。

「なんか時間がかっちゃってごめんね。お腹すいたでしょ？ここは鯖の味噌煮込み定食がめっちゃ美味しいんだよ。」

悠介はおしぼりで手を拭きながらボクにそう言った。

「鯖の味噌煮込み定食ですが、、、ならそれにしてみようかな。」
ボクは悠介のおすすめということもあってか鯖の味噌煮込み定食をセレクトした。

店内は昼休みのサラリーマンや工事の作業着をきた若い男達でにぎわっていた。

正直ボクはこのような定食屋はじめてた。そもそも鯖の味噌煮込み定食の様な家庭料理すら食べたことがあまりない。メニューをみると、出し巻き玉子、野菜炒め、ハンバーグ、肉じゃがなど、ボクが食べたことがないものがずらりと並んでいた。

「そーいやヤマトってさ、こういったかたちでいろんな人と遊んだりしてるの？俺あんまりなくてさ、、、どうなのかなって」

「ボクは時々ですかね、、、こうゆうのって緊張するし、、、」

「そうなんだ。ヤマトはかわいいからいろんな人から引っ張りだこなのかと思ったよ」

「そ、そんなことないですよ、、」

面と向かってかわいいといわれることがあまりないせいか、ボクの顔は少し赤らめた。

「はいっ、お待ちどうさま！鯖の味噌煮込み定食二つね。」

声のわりにはきれいな容姿のおばさんがボク達二人の前に鯖の味噌煮込み定食をもって現れた。

それをボク達の前に置くと、食欲をそそるような味噌のかがりがただよってきた。

「じゃあ食べよっか？」

「はい、いただきます！」

ボクは長い空腹もあってか、すぐさま鯖の味噌煮込みに箸を入れた。

一口食べた瞬間、ボクは母親の料理をする背中を思い出した。

ボクが母親と過ごした短い生活。

鮮明ではないにしろ、ボクの脳裏にうつすらと母との思い出が浮かんだ。

そう、それはボクが5歳の夏休みである。

第5話

『おかあさーん！みてみて！』

『どうしたのヤマト？そんなにはしゃいで。』

母さんはカゴに入った洗濯物を干しながらボクの方を小さく振り返る。

『ほら！やっと咲いたんだよ、ボクのあさがお。』

ボクの通っていた保育園では、園児が1人1人が鉢に種を蒔き、夏休みになると自分で植えた朝顔の鉢を家に持ち帰っていた。少し遅い時期に初めて花をつけた朝顔を得意げに見せるボクを見て、母さんはニツコリと微笑んで洗濯物をかごに置き、ボクと同じ目線になるよう膝を曲げた。

『あらほんと！この間、“みんなのあさがおは咲いてるのに、ボクのだけつぼみもついてない！！”って駄々をこねてたのに、、、それにしても綺麗な藍色ねえ。』

『あいいろ？』

聞き慣れない言葉にボクは首を傾げた。

『藍色っていうのはね、濃い青色のことよ。でも青よりもうちょっと落ち着いた色かな。』

『じゃあボクのあさがおは、あいいろのあさがお！、、でもボクはピンクとかあおの方がよかったなあ、、』

『藍色っていうのはね、日本の色なのよ。とても深みがあって、、大人の色って言ったらいいのかな？ヤマトも大きくなったら藍色の良さが分かるようになるかもね。』

『ボク、あいいろがすき！！おとなだもん！5歳だもん！』

ムキになるボクを見て、母さんはクスリと笑った。

『はいはいっ。もう5歳だもんねえ、ヤマトは。ってことは、あの人と会って丸々8年が経つのね、、あの時もウチの庭に朝顔が咲いてたっけ。』

そう呟く母さんは、ボクの顔を見ているものの、目線は遠くを見つめていた。

『、、おかあさん？』

ボクの声にハッとしたのか、母さんはビクツとしてボクの顔を見つめた。

『ごめんね、お母さんちよつとボーつとしちゃった。かごの洗濯物が干し終わったら、お買い物行こっか！』

『やったー！はやくはやく！！』

じたばたするボクを見て、母さんはスクツと立ち上がっておまわりさんのように敬礼した。

『りょうかいっ。スピード全開で行くぞおー！おっと、夕飯もついでに考えとかなきゃね、、昨日はお肉だったし、今日は魚かなあ。』

『えーっ！おにくがいい！！』

『好き嫌いしてると大人になれないぞー？そうだ、焼き魚じゃなくてたまには味噌煮込みにしようかな。よし、鯖の味噌煮込みに決定』

！ヤマト、今日のおさかな料理はおにくに負けないくらい美味しいわよ。』

『ほんとに！？じゃあ、おさかなが食べたい！』

母さんの鯖の味噌煮込みの味は、今はもう忘れてしまった。けれど、ボクが肉料理よりも魚料理の方が好きなのは、母さんが作ってくれた魚料理のお陰かもしれない。今考えると母さんは健康を気遣ってくれていたのか、野菜や魚中心のメニューが多かった気がする。

『、、、、うしたの、ヤマトくん？』

急に肩を叩かれ、ボクは小さくワツと声をあげてしまった。

『なんかボーッとしてたけど、あんまこういうの好きじゃなかった？』

『いえ！味噌がまるやかで、鯖の身も柔らかくて美味しいですよ。』

そう言ってボクは残りの味噌煮込みと御飯、味噌汁をかきこんだ。
周りを見渡すと、お昼時を少し過ぎたからか店内に人の姿はまばら
になっていた。

第6話

ボクは時々思い出す。

それは断片的なものであるが、確かに存在したものであった。ボクと母親が一緒に過ごした時間は短い。だが、ボクにとってその時間は忘れることのできないものなのだろう。

『ごちそうさまでした！ここの鯖の味噌煮込み美味しかったです』

『そう？ならよかったよ！！じゃあ会計済ませてくるから先に外で待ってて！』

『えっ、奢ってくれるんですか？ありがとうございます！』

ボクはそう言うと、ひと足先に定食屋から出た。

外はさっきまでの晴天だったのに、パラパラと小雨が降り始めていた。

（、、ニャー、、ニャー、、）

ふと下を見ると、マダラ模様の小さな子猫が、定食屋の軒下で雨宿りをしていた。

『雨宿りかい？』

ボクはしゃがみ込みながらマダラ模様の子猫に向かって話しかけた。

『お前も一人なのか？ボクもずっと一人だよ。ずっと、ずっと一人なんだ。』

ボクはただ、独り言の様に、そのマダラ模様の子猫に話しかけた。

『ごめん！！お待たせ。小銭出すのに手間どっちゃって。つか、雨降ってるじゃんっ』

定食屋の入り口がガラリと開き、少し慌てた様子の悠介が勢いよくでてきた。

『大丈夫ですよ。ごちそうさまでしたーっ』

ボクはすくっと立ち上がり、悠介の方へ向き直した。

『じゃあ、、、雨だし、とりあえず車へいそごうっ！』

ボクと悠介は近くのパーキングに置いてある、悠介の車へ濡れない様にと走って向った。雨はだんだんと強まってきていた。

第7話

『うわー！朝の天気予報じゃ雨が降るなんて言ってなかったのに、えーっと鍵は、』

雨足は段々と強まってきて、あんまりにも降るもんだから、靴もポロシャツもすっかり濡れてしまった。

悠介はポケットから車のキーを取り出し、ガチャガチャと鍵を開けた。

『早く乗って乗って！あー濡れちゃったよね？後ろの席にタオルあるから使って！』

『あ、はい。すみません借ります。』

ボクは助手席から体をひねり、後部座席からタオルをとった。

髪が結構濡れてしまったから、わしゃわしゃとタオルで拭き取った。服の上からも拭こうと思ったが、予想以上にボクは雨に打たれていたようで、タオルはもうしっとりしてしまった。

『あーやっぱり1枚じゃ足りなかったか。』

悠介は申し訳なさそうに言っているが、ボク以上にズブ濡れになっ

ている。

『だいたい拭けたんで大丈夫です。悠介さんの方がびしょびしょですよ、、、』

『うーん、、、御飯食べた後はドライブでもしようと思ってたんだけど、こんなに濡れちゃあねえ、、、』

確かにこんなに濡れていると、どこかショッピングモールに行くのも恥ずかしいし、ドライブするにも景色が悪い。今日はハズレだったかな。それにしても体が濡れているからか妙に寒い。

『ちょっとクーラーの温度下げてもらえますか？』

『え？クーラーつけてないけど、、、体が冷えてきてるんじゃない？風邪引くといけないし、今日はもう解散しよっか。ウチここから10分くらいのところだから、服乾かしてから帰りなよ』

いや、確かに寒いし、服が体に張りついて不快だけど、初対面で相手の家に行くのは抵抗がちょっとある。

それに、いわゆるそういう雰囲気になられても困る。

『さすがに悠介さんに悪いし、いいですよ！待ち合わせしたコンビ

二の近くの駅まで送ってもらえればいいんで』

『いや、遠慮しないでいいから！別にやらしいことするきもないし、大丈夫だから！』

そう言ってちょっと笑っているが、悠斗の顔からはウソ臭さは感じなかった。

『わかりました。じゃあお願いします。』

『おっけー。じゃあ行こっか。』

悠斗はそう言うのと、パーキングエリアの料金を払い、さっき来た交差点を右に曲がった。

第8話

（あの子猫、どうしてるかな・・・）

雨の音をかき消すような車のワイパー音が響く車内で、ボクはそんなことを考えていた。

自然と今は悠介と話す気にはなれない。それは悠介が嫌いだからという訳ではなく、ボクがただ喋る気がしないだけであった。悠介もボクのその雰囲気を感じたせいか、話しかけてくることはなかった。

ただただ無言が続く車内。

すると悠介がいきなり車を車道の外れに止めた。

「ちょっと、買うものがあるからヤマトくんここで待っていてくれるかな。」

ボクの返答も聞かずに悠介は一目散に駆け出した。

（どこにいったのかな）思いつつ、僕はおもむろに携帯を開いた。

（新着メール3件）と携帯の待機画面には表示されていた。最初の2件はボクがいつも愛用している、ゲイ向けの出会い系の掲示板からであった。

ぼくはそれらをいつものごとく流し見し、返信することはないメールを閉じた。

そしてもう1件は父からであった。

「今日は、お父さんの友達と飲みに行くから夜ご飯は自分でとってください。リビングの机の上にご飯代を置いてあるから。」

父からのメールはいつもこのような内容であった。ボクは掲示板の

メールと同様に返信することなく携帯を閉じた。

最初は父と一緒にご飯が食べれないこと、たわいもない話ができな
いことが悲しかった時期もあった。しかし今では父がいないほうが
かえって楽であるとかんじてしまう。

家庭の温かさや家族の愛情なんてものは幻想であるとおもっている。

「おまたせっ！寒かったからさ、シヨウガ湯買ってきたよ。これ飲
んだら体があつたまるんだよ。」

という悠介はボクに缶のシヨウガ湯を渡した。

「昔、俺が風邪引いてたときにおばあちゃんがいつもシヨウガ湯を
作ってくれてさ。そのシヨウガ湯はおいしくないんだけど本当に体
が温まるんだよね」

「ありがとうございます。ボクシヨウガ湯なんか飲むの初めてなん
で。」

「味はおいしくないと思うけど、温まるよっ」

缶を開けシヨウガ湯を一口のんだ。

ボクの口の中にはシヨウガの独特な香りと暖かさが広がった。

第9話

『、、これ美味しいかも』

思わずこぼれた言葉に悠介がニコツと笑った。

『ならよかった。俺、両親が共働きだったからおばあちゃんっ子でさ。風邪ひいた時とか、寒いときにシヨウガ湯を飲むんだけど、その度におばあちゃんを思い出すんだよね。』

シヨウガが入っているだけあって少しピリツと辛いけれど、どこか優しい味がする。季節ハズレのシヨウガ湯のおかげか、身体の内側からフツフツと温まってきた。

『なんか温かくなってきました。、、むしろ暑いかも。』

『まあ雨が降ってるとはいえ、夏だもんね。でも服が濡れっぱなしだと風邪ひいちゃうから、できるだけ急ぐね。』

そう言うとき悠介はエンジンをかけ、また車を走らせた。ボク達はそれからあまり会話をすることはなかった。でも決して

気まずいからとかじゃなくて、ボクがショウガ湯の温かさの余韻に浸っていたかったからだ。悠介もそんなボクの雰囲気を知りてか、そっとしてくれているようだった。

ボクは人という時のこういう時間が好きだ。言葉は無くても、お互いを気遣える関係って理想だと思う。

というよりも、ボクが人からああだこうだ言われるのが苦手だからかもしれない。

こうやってゲイの人と初めて会う時は

「趣味は？」

「どこに住んでるの？」

「今まで男と付き合ったことは？」

みたいな会話ばかりで、お見合いみたいに質問合戦になってしまいがちだ。

どうして足早にそんなに相手のことを知ろうとするのだろう。型に嵌った質問でその人の本質を見抜くなんて企業の入社面接でもあるまいし、ましてや好意がある人間とそんな話題ばかりと緊張するし、壁を感じてしまうけどな。悠介も最初はそんなタイプかと思っていたから、こうしてはおいておいてくれるのはちょっと意外だ。

『待たせてごめんね、俺んちここだから。』

悠介にそう言われて窓から外を見ると、ゆうに20階は超えているであろうマンションが左手に見えた。

この辺りで20階建てとなると、結構家賃は高いと思う。

『ここで降りてもらえるかな。駐車場がカドで狭いから助手席から出るの難しいだろうし』

『あ、はい。わかりました。』

そういうとボクはカバンを持って助手席のドアを開けた。気づかなかったが、雨はだいぶ落ち着いて小雨になっていた。

『その左を曲がったところが玄関だから、そこでちょっと待っててね。』

ボクは左手に見える玄関を確認すると、悠介にペコッとお辞儀をしたが、悠介は車を駐車スペースに向けてバックしていた。

第10話

モノトーンで統一されたワンルームの部屋

ボクは部屋の中央やや左寄りのイスに腰をかけた。

ボクは悠介の家で先に風呂に入らせてもらい、いまは悠介がシャワーを浴びている。今までいろいろな人と出会ってきたが、他人の家に入ることは初めてだった。ボクはこころのどこかで、悠介を安心できる存在として認めたからかもしれない。

ボクが風呂からあがった時に悠介は温かいココアを用意してくれていた。ココアを飲むと母親を思い出す。毎晩ボクが怖い夢を見て寝れなくなったときにはいつもココアをいれてくれたっけ。悠介に安心感を感じるのは、そんな懐かしさを感じさせてくれるからかもしれない。

『、、つと！、、やまとー』

（ん、、なんだ？）

『やまと、起きなよー。』

『あっ、、、、ごめんなさい。寝てました。』

ボクはココアを持ったまま懐かしさに浸ってたら眠りに落ちていた。

『いいんだよ。なんかやまとの寝顔可愛かったしっ』

そう言うと、やまとはにっこりと微笑み僕のほっぺたをツンッと軽く突ついた。

『可愛いって、そんなことないです。』

急にいわれたせいか、顔色がどんどん赤らめていった。

『やまと、そろそろ帰らないと親が心配するんじゃない？髪乾かしたら家まで送るよ』

と言うと悠介は髪を乾かすために洗面所へと向かった。

悠介いけると落ち着く。ボクは今まででこんな感情をもった人はいなかった。

『んっ、やまと？』

気がつくともボクは悠介の背中に抱きついていていた。悠介の背中からは優しい温かさを感じることができた。

『もうちょっと、いてもいいですか？』

その言葉はボクの口からとっさに発せられた。なぜ、そんなことを言ったのかはわからない。ただ、悠介と一緒にいたかったのだ。ボクは悠介に初めて本当の言葉をいった。

『やまと大丈夫なの？親は心配しない？』

『親なら大丈夫です。ボクの事には関心ないんで。』

『えっ、、どうゆうこと?』

ボクは悠介にボクの家庭環境のことを全て話した。ボクが悠介に話そうと思ったのはある感情が生まれたからかもしれない。

そう、ボクは悠介に恋をしてしまったのだ。

第11話

ボクは今までもろくに恋愛というものをしたことがない。

何度かクラスの女の子から告白されて付き合ったことはあるが、長続きはしなかった。

女の子はボクにとって恋愛対象ではないけれど、告白されて嫌な気分はしないし、むしろ嬉しかった。

というか、人から好意を持たれて嫌な気分になる人っているのかな。

女の子との関係が上手くいかなかったのは、デートをしたり、遊んでる時は楽しいんだけど、ふとした時に相手に対して罪悪感や負い目を感じてしまって、しばらくすると彼女という時間を楽しめなくなってしまうからだ。そんなボクの気持ちを相手は知ってか知らずか、向こうから別れを告げられることが多かった。でもボクはそれで良かったんだ。

女の子と付き合うのは楽しいけれどツライ。

抱きついた悠介の背中ではボクよりも広くて、意外と隆々としていてあたたかい。この人には自分のことを知ってほしい。

ボクの話を書く悠介の横顔はどこかうつろだった。一通り話し終えると、悠介が口を開いた。

『そっかー。そんなことがあったんだね』

『はい、、だから小さいときに学校の友達と家族の話題になると辛かったです。』

ボクは思った以上に長々と自分の生い立ちを喋っていたようで、悠介の髪はもう乾いてしまっていた。

（会った初日にいきなりこんなことを言って、悠介から軽蔑されたりしないかな、、）

『ヤマト、今日は家に帰ろうか。』

『へ?』

突然の予想してなかった言葉にあっけにとられて、ボクは思わず間拔けな声を出してしまった。

『また今度会お。ちゃんと家まで送るから。』

悠介は綺麗に整頓されているタオルを棚から1枚取り出すと首に掛け、リビングにテーブルに置いてあった財布を取りに行き、ボクには持ってきていたカバンを投げた。

『ほら、忘れ物ない？持ってきてたのはカバンだけだけ？』

『まあ、、、はい。無いです。』

悠介はマンションを降りるエレベーターの中でも、車内でも喋らなかった。

どうしたんですか？だなんて聞ける雰囲気でもなかったから、ボクはただただ黙っていることしかできなくて、家の近くで降りしてもらった時の挨拶以外は全く会話は無かった。

12 話目

何時間だろう。ぼくがベッドに座ってから。

ぼくは今までに感じた事ない心境を今感じている。ぼくが悠介に放った言葉は悠介はどう感じたのだろうか。素っ気ない対応をされることに慣れているぼく。だけど、悠介がぼくに対してどう思っているのか気がかりでならなかった。

結局ぼくはろくな睡眠もとることができずに朝を迎えた。

外からラジオ体操の音が聞こえてくる。まだ小学生も夏休みなのだろう。近くの小学校のグラウンドでは60人くらいの子ども達がラジオ体操をしている。ただこなすだけの子どもいれば真剣にしている子どももいた。しかし、多方の子ども達は欠伸や眠たそうな顔をしてラジオ体操をしている。

こんな朝早くにおきていることなんて滅多にないので、この様な光景はぼくにとって新鮮に感じることが出来た。

ぼくが小学生の頃は既に母親がいなかったせいか、ラジオ体操に行くことなどなかった。それは朝が早く起きられないからといった子どもらしい理由ではなく、ラジオ体操に来ている親子の中で一緒にラジオ体操する気分にはなれなかったからである。

その頃からぼくは周りと距離を取り始めたのかもしれない。

しかしぼくにも友達が全くいない訳ではない。小学生からずっと一緒だった圭太と言う友達が一人いる。そいつはぼくとは真反対の性格で活発な奴である。現にそいつは高校時代サッカー部のキャプテンをつとめており、今では大学のサッカーチームでエースをしている。そんな奴と僕が何故仲良くなったのか今でもよく分からないが、

そいつは親友と呼べる存在である。

ぼくが男しか愛する事ができないと告白したのもそいつが最初だった。

圭太とは学校以外でも、買い物に行ったりカラオケに行ったりとよく連んでいる。現に今日と圭太から誘われて映画に行く予定だ。しかし、昨日の悠介のことがあり映画など観る気分ではなかった。

その事を圭太に伝えようとメールをするために携帯を開いたら新着メールが一件来ていた。

携帯画面には新着メール 悠介 と記されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9088x/>

こどものじかん

2011年12月3日17時54分発行